

長生きは長「寿」か？

小谷 みどり

＜超高齢化の現実＞

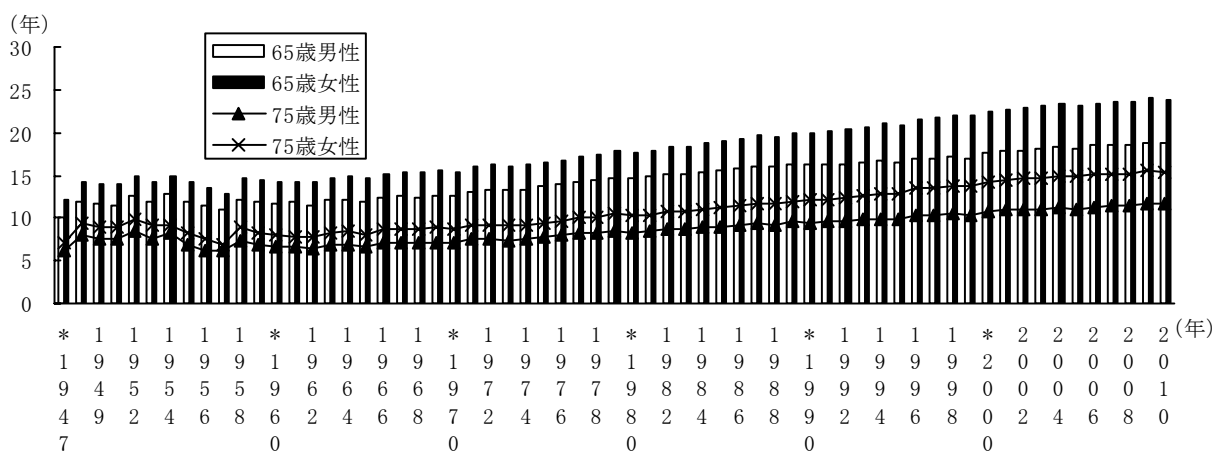
新年金制度についての議論が紛糾しているが、若い世代にとって、自分たちが納めた税金や保険料は将来、どこまで給付されるのかという不安は大きいはずだ。

65歳以上人口は2010年10月時点で総人口の23.1%を占めたが、国立社会保障・人口問題研究所の2012年1月推計によれば、2035年には33.4%と3人に1人が高齢者となり、2042年以降になると高齢者人口は減少するものの、高齢化率は上昇を続け、今年20歳の人々が65歳になる2057年には、39.6%に達すると見込まれている（出生中位・死亡中位仮定による推計）。なかでも、75歳以上の人口比率の上昇が著しい。2010年には11.1%だったが、2035年には5人に1人、2051年には4人に1人が後期高齢者であるという。

しかも年々、「老後」期間が長くなっている。厚生労働省の生命表によれば、2010年に65歳だった男性の余命は平均で18.86年、女性では23.89年もあり、1950年と比較すると男女ともに10年近く伸びている（図表1）。75歳でも、2010年の男性の平均余命は11.58年、女性は15.38年ある。

また厚生労働省『人口動態統計』から筆者が計算すると、2008年に80歳以上で死亡した人は全死亡者の53.8%を占めたが、1950年には7.4%しかいなかった。1990年でも38.7%だったので、この数十年で急速に長生きする人の割合が増加していることが分かる。

図表1 65歳、75歳の平均余命の年次推移



注：1971年以前は、沖縄県を除く値。

資料：*印は厚生労働省『完全生命表』、その他は厚生労働省『簡易生命表』

＜長生きはリスク？＞

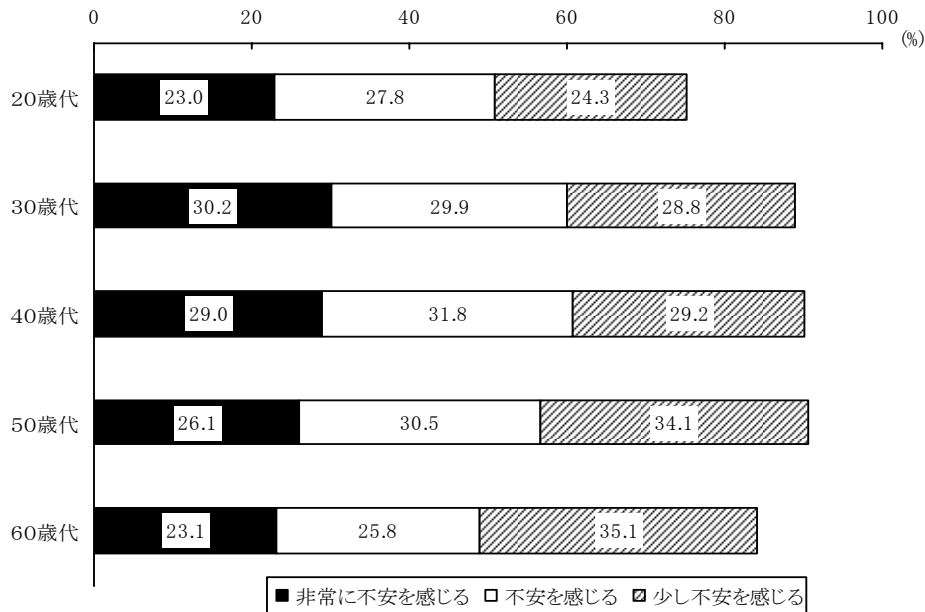
しかし昨今、長生きすることは、少なくとも当人にとって、必ずしもめでたいわけではないようだ。東京海上日動あんしん生命が2010年におこなった調査では、長生きすることが「リスク」か「チャンス」

という問いに対して、25歳から65歳までの68.3%が「リスク」と回答した。

長生きすることに不安を感じる人は少なくない。第一生命経済研究所が2011年におこなった調査（調査対象は30歳以上69歳までの男女1,200人）によれば、長生きすることに「非常に不安を感じる」「やや不安を感じる」と回答した人は、合わせて78.2%もいた。年代別でみると、不安を感じる人は40歳代、50歳代が多いが、60歳代ではそれほどでもない。

別の調査でも、同様の傾向が示されている。生命保険文化センターがおこなった『平成22年度生活保障に関する調査』によれば、老後生活に不安を持っている人は30歳代から50歳代が多かったが、「非常に不安を感じる」「不安を感じる」人の合計は、60歳代が最も少ない（図表2）。

図表2 老後生活に不安をもっている人の割合

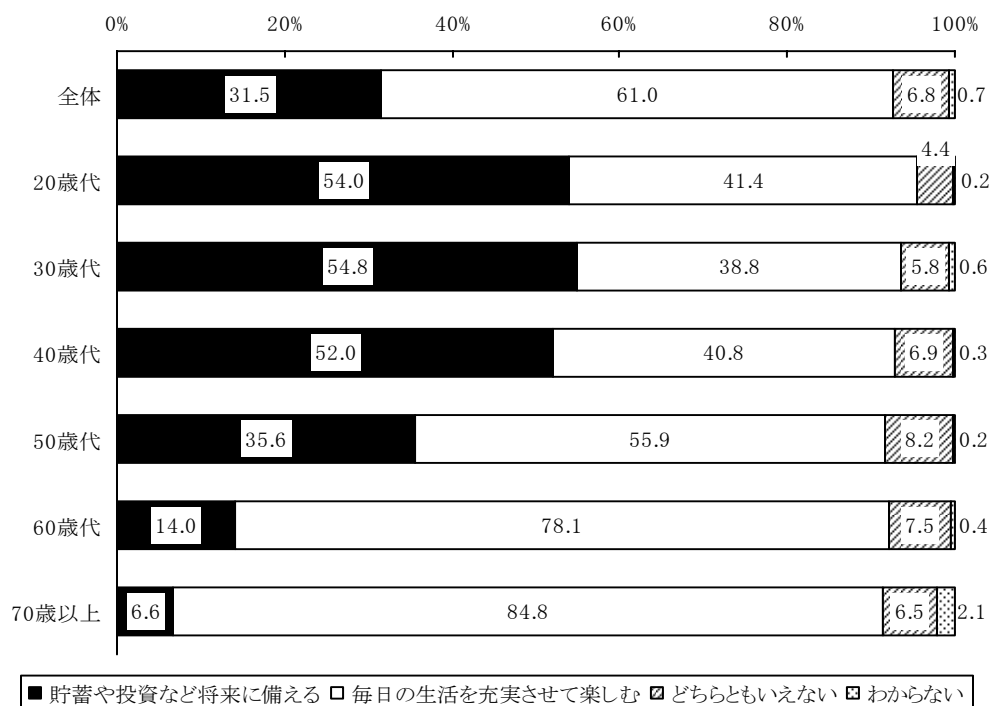


注：調査対象者は18～69歳の男女個人。2010年4月17日から6月18日に、面接聴取法でおこなった。回収サンプルは4,076。
資料：生命保険文化センター『平成22年度生活保障に関する調査』2010年

不安を感じる内容をみると、30歳代、40歳代では特に、「公的年金だけでは不十分」と考える人の割合が高く、「退職金や企業年金だけでは不十分」と考える人も、この世代に多い（図表省略）。

その結果、若い世代では、将来への備えに精一杯で、生活を楽しむどころではない人が少なくない。内閣府の調査では、今後の生活において、「貯蓄や投資など将来に備える」と回答した人は31.5%、「毎日の生活を充実させて楽しむ」と回答した人は61.0%と、全体では、将来の備えよりも日々の暮らしを充実させたいと考える人が多い（図表3）。ところが年代別でみると、若い世代と高齢者では、価値観に大きな違いがみられる。20歳代から40歳代までは「貯蓄や投資など将来に備える」と回答した人が過半数を占め、「毎日の生活を充実させて楽しむ」人は4割程度だったのに対し、60歳代以上では、「貯蓄や投資など将来に備える」と回答した人はわずかで、「毎日の生活を充実させて楽しむ」人が8割前後いる。

図表3 今後の生活についての考え方



注：調査対象者は20歳以上の男女10,000人。2011年10月に面接聴取法でおこなった。有効回収数は6,212人。
資料：内閣府『国民生活に関する世論調査』2012年

日経産業地域研究所が2011年におこなった『老後の人生設計に関する調査』でも、「現在の生活を切り詰めても老後のため資産を多く遺したい」と考える人は、男女ともに20歳代から40歳代で多く、なかでも30歳代と40歳代の女性の回答率は半数を超えた。平均で見れば、余命がより長い分、女性の方が長生きすることへの不安が強く、将来への備えをしたいと思う人が多いのだろう。

<安心をどう担保するか>

日本は世界一、平均寿命が長い国である。しかし、年金問題や医療費の自己負担増など経済的な問題への不安だけでなく、孤独死の増加、年間3万人を超える自死者、社会の無縁化、進まない介護の社会化など、わが国は、若い世代にとって、明るい老後が描ける環境にあるとはいえない。就職難や雇用不安で現在の安心さえも確保できない人たちには、老後の安心をどう担保するかを考えるゆとりはないかもしれない。「長寿」という言葉に反し、多くの若年・中年層にとって長生きがリスクであるのは不幸なことだ。一方、60歳以上では、老後生活への不安を感じる人が最も少なく、将来への備えよりも日々の生活を楽しまたいと考える人が多いという、世代間の価値観格差は、さまざまな問題を示唆している。

人口減少・超高齢社会において、老後生活への不安が軽減され、老若男女問わず、長生きが肯定される社会でなければ、経済の循環が停滞するだけでなく、精神的にも日本人はますます疲弊していくだろう。